

「神のめぐみを見て」 一使徒行伝講解説教 26-

使徒行伝

11章19節～30節

説教

本庄侑子牧師

今日の聖書箇所は《アンテオケ教会の誕生》として知られています。アンテオケ教会とは、異邦人が中心となって成立した最初の教会です。後に、パウロを三度にわたって伝道旅行に送り出した教会でもあります。

教会に初めて異邦人が加わったのはカイザリヤでした。異邦人中心の教会が誕生するのであれば、そのままカイザリヤで話が展開されるのが自然です。しかし聖書は、何事もなかったかのようにアンテオケにスポットを変えるのです。

前回までの出来事の中にいたペテロやエルサレム教会は、劇的な出来事後、考え込んでいたかもしれません。さて、異邦人も教会に加わった。さあ、私たちはどうしたらいいのだろう、と。しかし、主がすでに進んでおられました。

その頃、500キロほど北に行った場所でも、異邦人に福音が宣べ伝えられていました。きっかけは迫害にありました。彼らもペテロと同じでした。自分たちの計画でアンテオケに行って、異邦人に伝道しようと思った訳ではなかったのです。迫害によって散らされた先で、出会うはずのなかった人との出会いが与えられ、福音を伝えることとなりました。

と言っても、彼らの多くもユダヤ人以外には御言葉を語りませんでした。言語的な問題もあったかもしれませんが、律法を守ろうとしていたのだと思います。しかしその中に、ユダヤ人ではあっても、エルサレムから離れて生活してきた人たちがいました。祭りに参加するためにエルサレムへやってきた時、福音を聞いて信仰を与えられ、教会に加わった人たちでした。

彼らは異邦人の中で生活してきました。当時の世界共通語のギリシア語にも長けていました。だから、散らされた先で出会ったギリシア人にも抵抗を覚えることなく、主イエスのことを宣べ伝えたのだと思います。主の御手は彼らと共にありました。大ぜいの人々が主に立ち返り、アンテオケ教会が生まれました。

その様子はエルサレム教会の耳にも入りました。コルネリオ一家が教会を受け入れるだけでも大変だった人たちです。アンテオケで異邦人中心の教会が生まれたと聞いて驚いたことでしょう。本当に教会なのか疑う人もいたでしょう。早速調査のためにバルナバを派遣します。

バルナバはクプロ生まれのレビ人でした。ア

ンテオケ教会のメンバーと同じ背景を持ち、律法にも詳しいバルナバはうってつけでした。バルナバは、かつてサウロがエルサレム教会に受け入れられなかった時、間に立って執りなした人でもありました。この人選にも、主のご配慮が働いていました。

アンテオケについたバルナバは、これまでバラバラだったユダヤ人とギリシア人が一緒に礼拝している様子に神の恵みを見て、喜びました。全ての人々のために十字架についてくださったイエスが主。私たちは皆、主に愛されている存在。そんな爆発的な喜びが、生まれたばかりの教会に満ち溢れていたことでしょう。

バルナバは、「主に対する信仰を揺るがない心で持ちつづけるようにと、みんなの者を励まし」ました。力をつけて前進し続けよ、という励ましではありません。むしろ、すでに置かれている絶大なキリストのご支配のもとに立ち続けられたら良い、そんな励ましです。

このアンテオケで初めて、弟子たちはクリスチャンと呼ばれるようになりました。クリスチャンは日本語ではキリストのもの。キリスト、キリストばかり言っているキリストおたく。そういう響きです。それほどに、彼らの主語がキリストになっていたのだと思います。キリストが私たちの主。キリストが私たちに導いてくださる。そうして、自分たちが何をするかではなく、キリストが私たちを通して何をしておられるか、にいつも心を向けていたのでしょう。

アンテオケ教会は、大飢饉が起こった時、エルサレム教会に援助を送ることになりました。彼らは、顔を合わせたことがないユダヤ人たちのために、惜しみなく捧げました。エルサレム教会は、受け入れることをためらってきた異邦人たちに助けてもらう経験をし、悔い改めも起こったのではないのでしょうか。教会は、自分たちで全てをしようとしなくてもいい。助けを受ける時があってもいいのです。助けを受けることもまた、聖霊のお働きの中にあるからです。

教会の主人公は私たちではありません。イエス・キリストであり、聖霊です。私たち大阪教会もキリストの教会として、聖霊のお働きの中で、今も立てられ、導かれています。一人一人の人生もその中にある、そう信じきって良いのです。

(記 本庄侑子)